HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | ドイツ高教会運動とハイラー宗教学の形成 |
| Author(s) | 宮嶋, 俊一 |
| Citation | 北海道大学文学研究院紀要, 172, 93（左）-105（左） |
| Issue Date | 2024-03-22 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/bfhhs.172.l93 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/91379 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 05_172_Miyajima.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究院紀要 172 （2024）

# ドイツ高教会運動とハイラー宗教学の形成

宮 嶋 俊 一

**Abstract**

This study explores the foundation of religious studies in Germany during the Weimar Republic and its relationship to religious movements, beginning with Friedrich Heiler (1892–1967). This paper forms a part of a larger study. Heiler was a German religious scholar and religious activist between the Weimar Republic and the post-World War II period. However, his activities were suspended during the war. Hence, his works can be classified as prewar and postwar, despite the overlap in its substance.

We have confirmed that Heiler's writing activities shifted domains in the 1920s from the Liberal Protestant journal *Die Christliche Welt* to *Hochkirche*, a journal favoring the German High Church movement. The reasons for this transfer include Heiler's nostalgia for Catholicism, isolation at Marburg University, approach to the High Church movement for escaping this situation, active participation in ecumenical activities, and engagement in the liturgical and worship reform movement. Moreover, Nathan Söderblom, a supporter of Heiler, died in 1931. Heiler probably became increasingly isolated in the Protestant world after Söderblom's death. In such circumstances, Heiler became further involved in the German High Church movement and published numerous works on church history in *Hochkirche*, while writing little on general religious history and religious studies. The Nazi regime banned the publication of *Hochkirche*, which represented the foundation of Heiler's activities, thus stopping his pre-World War II activities.

10.14943/bfhhs.172.l93

## 1．はじめに

筆者はこれまで，ワイマール共和制期ドイツを中心とした宗教学の形成と宗教運動との関わりについて，フリードリヒ・ハイラー（1892–1967）を起点として研究を行ってきた[1]。本稿もその一端をなす[2]。ハイラーはワイマール共和制期から第二次世界大戦後にかけて活躍したドイツの宗教学者・宗教運動家であるが，その活動は，戦中期に休止させられたため，（内実としては重なるところも多いが，形式的には）戦前と戦後に大別できる。

戦前の活動に関して述べると，1918 年に主著となる『祈り』[3] を出版し 1920 年にマールブルク大学神学部に着任した時期がハイラーの学術活動の起点と言える。さらに 1931 年から正式に関わることとなったドイツ高教会運動はハイラーにとって重要な意味を持つ。この運動はエキュメニカルな志向を持ったキリスト教改革運動であり，プロテスタンティズムにおいて聖体拝領などカトリック的要素を重視しそれに基づき典礼・礼拝の改革運動にも積極的に取り組んだ。『高教会（Hochkirche）』（後に『一つの聖なる教会（Eine Heilige Kirche）』とタイトルを変更する）という機関誌を刊行し，ハイラーは長くその編集長を務めた[4]。

---

[1] ハイラーに関しては，拙著『祈りの現象学―ハイラーの宗教理論』ナカニシヤ出版，2014 年を参照。また，ハイラーの宗教学と宗教運動との関わりについては，拙稿「ハイラー宗教学再考」『北海道大学文学研究院紀要』（168）37–54 頁，2022 年を参照。

[2] 本稿は日本宗教学会大 82 回学術大会（2023 年 9 月 9 日（土）東京外国語大学　府中キャンパス）での発表に加筆，修正を加えたものである。

[3] Heiler, Friedrich, *Das Gebet. Eine religionsgeschichtliche und religionspsychologische Untersuchung,* Ernst Reinhardt, 1918.

[4] ハイラーのドイツ高教会運動での活動については，Niepmann, Helmut Martin, Professor Friedrich Heiler und die Hochkirchliche Vereinigung, Haut, Theodor / Kisker, Ursula (Hg.), *Siebzig Jahre Hochkirchliche Bewegung (1918-1988). Hochkirchliche Arbeit. Woher? — Wozu? — Wohin? (Eine heilige Kirche NF 3)*, Bochum 1989, S. 55–89, および，Langfeldt, Jan, *Die hochkirchliche Bewegung in Deutschland und die Eucharistiefeier der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft von 1931: Unter besonderer Berücksichtigung des Offertoriums*, Grin Verlag, 2007 を参照。

筆者はこれまでもハイラーにとってのドイツ高教会運動の意義について，論文や学会発表を通じて報告してきた。その意義のひとつは，1918 年に出版された『祈り』において説かれた「祈りの理想」を実現するための実践的な活動の場としての意義である。すなわち，ドイツ高教会運動において目指された新たな典礼・礼拝の創設は『祈り』の延長線上に位置するものであり，ハイラーの宗教的・宗教学的活動はその「理論と実践」において理解される，というものである[5]。その意味で，今日のわれわれからすれば，宗教学からの逸脱に見える宗教活動は，ハイラーにおいては学問的活動とは矛盾せず，一貫していたと考えられる。

そのような見方には妥当性があると考えるが，本稿では，もうひとつ別の意味を考えていきたい。それは，ハイラーの 1930 年代の活動拠点としての意味である。というのも，1930 年代のハイラーの著述活動のスタイルは機関誌『高教会』で論文・評論を次々に発表し，それをまとめて著作化し，Ernst Reinhardt 社から刊行するというものであったからである。

本稿の筋立てを先取りして言うと，カトリック出自のハイラーが，信仰上の理由でプロテスタントへと「改宗」し，マールブルク大学プロテスタント神学部に着任したが，カトリックへの「郷愁」断ちがたくそこで孤立する中で，新たな活動の場を求めた結果，当該運動にたどり着き，さらにはそこを出版活動の拠点としていった，という流れとなる。またその結果，ハイラーの「宗教学」が，今日の私たちが考える意味での宗教学ではなく，より実践的な活動として形成されていったことも指摘したい。以下，ハイラーのライフヒストリーと重ねながら，ハイラーの活動内容を具体的に示し，分析を加えつつ，彼独自の宗教学が形成されていく，その一端を見ていくこととしたい。

[5] 宮嶋前掲論文参照。

## 2．1920 年代前半におけるハイラーの活動

1918 年に『祈り』を出版したハイラーは 1920 年，マールブルク大学神学部に助教授として着任する。それに先立ち，カトリックからプロテスタントへと「改宗」したとされる[6]。本稿末に付した参考資料を見ると，この時期（1920～25 年）は雑誌『キリスト教世界』を活動の場としていたことがわかる。同誌には継続的にハイラーの論文が掲載されているが，同誌の編集を務めていたマルティン・ラーデはマールブルク大学神学部教授であり，「文化プロテスタンティズム」の代表者と位置づけられてきた人物である。ハイラーとラーデの関係についてはまだ調べ切れていないが，少なくとも同誌に少なからぬ論考を発表することが可能であったことは明らかであり，それだけでなくその頻度や分量からして 1920 年代前半のハイラーにとって『キリスト教世界』誌はその活動における重要な位置を占めていたと言える。

1920 年には「一般宗教史におけるキリスト教の絶対性（Die Absolutheit des Christentums in der allgemeinen Religionsgeschichte）」というタイトルの講演録[7] が同誌に掲載される。トレルチの「キリスト教の絶対性と宗教の歴史」を彷彿とさせるこの論考は，宗教史におけるいわゆる「平行理論」に基づきつつ，諸宗教に対するキリスト教の優越性を説いた論考であり，主張そのものは護教的であるが，少なくともその手法において当時の宗教史理論に依拠した，学術的性格を有した論考であると言えよう。

また，1923 年には，同誌上において，インド人宣教師スンダー・シングに

---

[6] 1918 年 10 月 13 日付けゼーデルブロムからオットーに宛てた手紙を参照。Misner, Paul (Hrsg.), *Friedrich von Hügel — Nathan Söderblom — Friedrich Hailer: Briefwechsel 1909–1931*, Bonifatius-Druckerei, 1981, S.309.

[7] Heiler, Friedrich, Die Absolutheit des Christentums in der allgemeinen Religionsgeschichte. Vortrag in der Religionswissenschaftlichen Gesellschaft zu Stockholm (1919). *ChrW*, Vol.34, 1920, Sp.226–230, 244–248, 258–262.

関する論考を発表している[8]。この論考は，ハイラーがスンダー・シングというインド人宣教師の活動や言動に，プリミティブなキリスト教の理想を見出し，イエス・キリストの再来とまで高く評価したものだが，一方でその言動を虚偽として否定し，スンダー・シングは虚言癖のある精神病者に過ぎないと主張したプフィスターとの間で論争を引き起こすこととなった。すなわち，この論争の端緒となった論考が，同誌に発表されているのである。実践的な性質を有した論考であり，スンダー・シングの宗教的（キリスト教的）「真実性」を主張するという意味では神学的とも言えるが，その論証の手続きで宗教史的な知識を援用している点において，（少なくとも当時の学問状況においては）宗教（史）学的であることが目指されていると言える。

このように，『キリスト教世界』に掲載されたいくつかの論考は，護教的・神学的・実践的な傾向を持ちつつも，その手続きにおいて「宗教学」的であることが目指されていた。

## 3．1920 年代半ばにおけるハイラーと高教会運動との関わり

『キリスト教世界』誌 1925 年 10 月号には，8 月にストックホルムで開催された「ライフ・アンド・ワーク世界会議」の報告が掲載されている[9]。このライフ・アンド・ワーク世界会議は，エキュメニカル運動の潮流に棹さすものであり，教派を超えて経済や政治，道徳などを含む社会問題に関する諸教会の協力について話し合う会議で，ナータン・ゼーデルブロムの主導で開催された。ゼーデルブロムはこの会議以前から，エキュメニカルな対話の促進や，第一次世界大戦の和平交渉に関わっていた。カトリック教会は参加しなかったが，それ以外の多くの教派がこの会議に参加した。ハイラーはこの会議で開催された礼拝の様子などについて，詳細に報告している。

---

[8] Heiler, Friedrich, Sadhu Sundar Singh, der Apostel Indiens, *ChrW*, Vol.37, 1923, Sp. 417–483.

[9] Heiler, Friedrich, Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz, *ChrW,* Vol.39, 1925, Sp.865–875.

興味深いのは，この報告が『キリスト教世界』だけでなく，ドイツ高教会運動の機関誌『高教会』にも掲載されたことである[10]。当時，キリスト教（とりわけプロテスタント）世界で大きな影響力を持っていたゼーデルブロム主催の国際会議の報告が『キリスト教世界』に掲載されることは不思議ではないが，同時にエキュメニカルな志向を持っていた高教会運動の機関誌にも同じ報告（短縮版）が掲載されたのである。結果的にこの報告はハイラーが活動の場を『キリスト教世界』から『高教会』へと移す，その嚆矢になった論考とも言える[11]。

さらに，『高教会』1926 年の 1 月号からは，前年 12 月にマグデブルクで開催された高教会同盟会議でのハイラーの講演が掲載され[12]，この時期から，ハイラーが高教会運動に接近していることがわかる。

## 4．1920 年代後半のハイラー

1920 年代後半，ハイラーはマールブルク大学プロテスタント神学部で孤立する。その（重要な）理由のひとつは，プロテスタントに「改宗」したと言いながらも，カトリックへの「郷愁」を断ち切ることができず，プロテスタント的な環境に馴染むのが難しかったことである。1927 年 8 月 3 日付けの，アンネ・マリー・ハイラーからゼーデルブロムに宛てた手紙には，以下のような内容の記述が存在する。すなわち，ハイラーがマールブルク大学プロテスタント神学部で孤立していること，そのことを同僚であるオットーが心配し，ゼーデルブロムに相談するよう（アンネ・マリーが）オットーから言わ

[10] Heiler, Firedrich, Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz, *Hochkirche*, Vol. 7, 1925, S.359–363; Vol.8, 1926, 118f.

[11] なお，参考資料からわかる通り「Jahrbuch für Liturgiewissenschaft」と題された典礼学の年報を紹介した文章も，1924 年は『キリスト教世界』で連載されていたが，その後は『高教会』での掲載に変更されている。

[12] Heiler, Friedrich, Evangelische Hochkirchentum. Vortrag auf der Tagung der Hochkirchlichen Vereinigung in Magdeburg 1. Dezember 1925, *Hochkirche*, Vol.8, 1926, S.2–16, 36–46, 68–74.

れたこと，1927 年 8 月に開催されるローザンヌでの国際会議の終わり頃（8 月 18 日～20 日頃）に，夫，フリードリヒと話をして，彼を助けてくれないだろうか，という相談が記されているのである[13]。

そうした状況に呼応するかのように『キリスト教世界』への文章掲載の機会は失われていく。そして，それに代わって，文章発表の場として重要な意味を持ち始めるのが『高教会』である。参考資料を見れば明らかなように，1930 年以降，1940 年の発刊停止まで，『高教会』（1934 年からは『一つの聖なる教会』とタイトル改変）に占めるハイラーの文章掲載量は圧倒的となる。その内容は概ね，典礼・礼拝改革に関わる文章，エキュメニカル運動に関わる文章，そして膨大な書評が含まれる。結果的に，狭義の宗教学的（あるいは宗教史学的）な論考は減り，高教会運動に関する実践的論考が増加していくこととなる（参考資料は 1930 年までとなっているが，この後もほぼ同じような状況が続く）。

## 5．考察

本稿においてまず確認したかったのは，1920 年代においてハイラーの著述活動の場が『キリスト教世界』から『高教会』へと移行したということ，その理由として考えられるのがハイラーのカトリック教会への「郷愁」，マールブルク大学でのハイラーの孤立，その状況を脱するための高教会運動への接近，そしてエキュメニカル運動や典礼・礼拝改革運動への積極的な参加，といったハイラーの置かれた状況や活動内容の変化である。さらにハイラーの後ろ盾ともなっていたナータン・ゼーゼルブロムは 1931 年に死去する。今回は 1920 年代を取り上げたため 30 年代の動きの詳細には触れないが，ゼーデルブロムの死去によりハイラーはプロテスタント世界でますます孤立を深めていった可能性は高い。そうした中，ハイラーはドイツ高教会運動への関わりを深め，教会史に関する著作を多く執筆する一方，一般宗教史・宗教学

[13] Misner，Paul（Hrsg.），*Briefwechsel*，S.321-322.

に関する著作はほとんど書かれなくなっていく。そして，ハイラーの活動の基盤となっていた『高教会』の出版がナチス政権によって禁止されたことによって，ハイラーの第二次世界大戦前の活動は停止することとなるのである。

もし，ハイラーがプロテスタント世界に馴染み，そこでの活動を継続し，またそれが周囲からも認められ，結果，プロテスタント出版界に活動の場を維持し続けていれば，『高教会』に活動の場を求める必要はなかったであろうし，エキュメニカル運動との関わりも深まらなかった可能性がある。そうなれば，『高教会』に発表してきたような実践的・論争的な評論ではなく，むしろ（狭義の）宗教（史）学的論考が多く書かれることになったかもしれない。だがそれが難しかったからこそ，『高教会』へと活動の場が移された。ドイツ高教会運動にコミットしたことにより，ナチズム下においては，その活動を制限されることとなったが，それは，ハイラーがナチズムを積極的に批判したからではなく，国際的な人間関係がその理由であるとされる。いずれにせよ，結果的にナチズムに加担することがなかったため，戦後，公職追放されることもなく，その活動にも支障が出なかった。それゆえ，戦後ドイツの宗教学会において重鎮としての役割を果たすこととなった。

では，ドイツ高教会運動へのコミットメントは，ハイラーの「宗教学」にどのような影響をもたらしたのだろうか。元々，ハイラーは聖職者になることを夢見ていた。その夢を絶たれたハイラーを支えたものが「宗教学」であった。よって，ハイラーの「宗教学」が偽装神学的（ルードルフ）[14] なものとなったのも，必然であったと言える。その「宗教学」は，ドイツ高教会運動との関わりを通じて，ますます実践的なものとなっていった。19 世紀の後半を宗教学の黎明期と捉えるならば，20 世紀前半を宗教学の発展的形成期と位置づけることができよう。そしてこの時期，ハイラーは宗教運動へと傾倒し，アカデミズムでの活動から距離を置いていったが，それは，今日のわれわれからは，宗教学からの疎遠化のように見える。だが，ハイラーにとっては理論

[14] Rudolph, Kurt, Die Problematik der Religionswissenschaft als akademisches Lehrfach, *Kairos*, Vol.9. S.22-42.

と実践を融合させつつ，理想的な宗教のあり方を模索する，いわば「実践的宗教学」を形成していくプロセスであった。そのようにして形成されていった実践的宗教学が戦後において諸宗教間の対話，さらには諸宗教の統合といった主張へと展開していくのだが，その問題については稿を改めて論じたい。

（本研究は JSPS 科研費 21K00064，20H01188 の助成を受けた。）

## 参考文献

宮嶋俊一『祈りの現象学―ハイラーの宗教理論』ナカニシヤ出版，2014 年

――「ハイラー宗教学再考」『北海道大学文学研究院紀要』（168）37-54 頁，2022 年

Heiler, Friedrich, *Das Gebet. Eine religionsgeschichtliche und religions-psychologische Untersuchung*, Ernst Reinhardt, 1918.

――, Die Absolutheit des Christentums in der allgemeinen Religionsgeschichte. Vortrag in der Religionswissenschaftlichen Gesellschaft zu Stockholm（1919）. *ChrW,* Vol. 34, 1920, Sp.226-230, 244-248, 258-262.

――, Sadhu Sundar Singh, der Apostel Indiens, *ChrW*, Vol.37, 1923, Sp.417-483.

――, Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz, *ChrW*, Vol.39, 1925, Sp.865-875.

――, Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz, *Hochkirche*, Vol.7, 1925, S. 359-363; Vol.8, 1926, 118f.

――, Evangelische Hochkirchentum. Vortrag auf der Tagung der Hochkirchlichen Vereinigung in Magdeburg 1. Dezember 1925. *Hchkirche*, Vol.8, 1926, S.2-16, 36-46, 68-74.

Langfeldt, Jan, *Die hochkirchliche Bewegung in Deutschland und die Eucharistiefeier der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft von 1931: Unter besonderer Berücksichtigung des Offertoriums,* Grin Verlag, 2007.

Misner, Paul（Hrsg.）, *Friedrich von Hügel — Nathan Söderblom — Friedrich Hailer: Briefwechsel 1909-1931*, Bonifatius-Druckerei, 1981.

Niepmann, Helmut Martin, Professor Friedrich Heiler und die Hochkirchliche Vereinigung, in: Haut, Theodor / Kisker, Ursula（Hg.）, *Siebzig Jahre Hochkirchliche Bewegung (1918-1988). Hochkirchliche Arbeit. Woher? — Wozu? — Wohin? (Eine heilige Kirche NF 3)*, Bochum 1989, S. 55-89.

Rudolph, Kurt, Die Problematik der Religionswissenschaft als akademisches Lehrfach, *Kairos*, Vol.9. S.22-42.

**参考資料**（＊印は書評など，分量が１頁に満たないような短い文章。なお長いタイトルは一部省略した。）

| 年号 | 『キリスト教世界(ChrW)』に掲載された文章 | 『高教会(Hk)』に掲載された文章 |
|---|---|---|
| 1920 | - Die Absolutheit des Christentums in der allgemeinen Religionsgeschichte. Vortrag in der Religionswissenschaftlichen Gesellschaft zu Stockholm (1919). ChrW 34 (1920) Sp.226-230, 244-248, 258-262<br>- Ut omnes unum. Predigt beim schwedischen Gottesdienst im "Michelchen" in Marburg. ChrW 34 (1920) Sp.515-518. | |
| 1921 | * Die hochteure Pforte. Schriften von Jakob Boeme, herg. von W. Irmer. Furche-Verlag, Berlin 1921. ChrW (1921) Sp.923. | |
| 1923 | - Sadhu Sundar Singh, der Apostel Indiens. ChrW 37 (1923), Sp.417-483.<br>* Soehngen, Oskar, Das mystische Problem in Plotins Weltanschauung. Kroener, Leipzig 1923. ChrW37 (1923) Sp.592. | |
| 1924 | * Liturgiewissenschaft, Jahrbuch fuer, herg. von Odo Casel. Aschendorf, Muenster. I 1921, II 1922: ChrW 38 (1924) 59f. [, IX 1929: Hk 13 (1931) 139; X 1930, XI 1931, Registerband 1933: EhK 16 (1934) 89.]<br>* Die Reden Gotamo Buddhos. Aus der mittleren Sammlung Majjhimanikayo des Palikanons, 3Bde. Die letzten Tage Gotamo Buddhos. Aus dem grossen Verhoer ueber die Erloeschung. Mahaparinibbanasuttam. / Die Lieder der Moenche und Nonnen Gotamo Buddhos. Aus den Theragatha und Therigata. Der Wahrheitspfad Dhammapadam. / Die Reden Gotamo Buddos. Aus der laengeren Sammlung Dighinikayo. Uebersetzt von Karl Eugen Neumann. 2. und 3. Auflage. P. Piper, Muenchen 1921/23. ChrW (1924) Sp.193.<br>* Gilg, Otto, Die Messe. Dietschi, Olten 1924. ChrW 38 (1924) Sp.917. | |
| 1925 | - Friedrich von Huegel +. ChrW 39 (1925) Sp.265-272.<br>- Fuenfzig Jahre Altkatholizismus. Zum Tode von Bischof Eduard Herzog. ChrW 38 (1924) Sp.651-660, 699-706.<br>- Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz. ChrW 39 (1925) Sp.865-875.<br>- Ein Zerrbild von Stockholm. ChrW39 (1925) Sp.991-997. | - [Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz. ChrW 39 (1925) Sp. 865-875.] Teiweise in: Hk7 (1925) 359-363; 8 (1926) 118f. |

| | | |
|---|---|---|
| 1926 | | – Evangelische Hochkirchentum. Vortrag auf der Tagung der Hochkirchlichen Vereinigung in Magdeburg 1. Dezember 1925. in: Hk8 (1926) 2–16, 36–46, 68–74.<br>* [Die Gottesmutter. Eine evangelische Marien-betrachtung. MNN, 23.12.1925. Abgedruckt in: Hk 8 (1926) S.54–57] |
| 1927 | – Tagung des hochkirchlich-oekumenischen Bundes 1926 in Berlin. ChrW 41 (1927) Sp.35–37.<br>– Das Buch der Reformation Huldrych Zwanglis. Von ihm selbst und gleichzeitigen Quellen erzaert durch Walter Koehler. Ernst Reinhardt, Muenchen 1926. ChrW41 (1927) Sp.832.<br>– Braeunlich, P., Sundar Singh in seiner wahren Gestalt. Ungelenkt, Dresden. ChrW 41 (1927) Sp.233f. [; Hk 9 (1927) 27f.]<br>– Auf dem Wege zur einen Kirche. Kritische Gedanken ueber Lausanne. ChrW41 (1927) Sp.899–907. | – Braeunlich, P., Sundar Singh in seiner wahren Gestalt. Ungelenkt, Dresden. Hk 9 (1927) 27f. [; ChrW 41 (1927) 233f]<br>– Die hochkirchliche Bebegung (Cahtolic Movement) in der anglikanischen Kirche. Hk 9 (1927) 79–85, 105–115, 136–144, 169–173.<br>– Die Lausanner Konferenz fuer Glaube und Kirchenverfassung. Hk 9 (1927) 297–301, 323–341. |
| 1928 | – Clemen, Carl, Die Religion der Erde. Bruckmann, Muenchen. ChrW 42 (1928) Dp.724f. | |
| 1929 | | – Reformation der Reformation. Hk11 (1929) 358–365.<br>– Hochkirchliche Aufgaben. Hk 11 (1929) 318–311. |
| 1930 | – Professor Heiler und die apostolische Sukzession 2 (Erwiederung auf Karl Ludwig.) ChrW 44 (1930) Sp.479ff. | – Orthodox, katholisch und evangelisch. Hk 12 (1930) 3–9.<br>* Le Fort, Gertrud von, Hymnen an die Kirche. 2Aufl. Koesel&Pustet, Muenchen 1929. Hk12 (1930) 31f.; 95f.<br>* Dimmer, Hermann, Skrupulositaet und religioese Seelenstoerungen. Ludwig Auer, Donauwoerth 1930. Hk15 (1933) 152.<br>– Apostolische Sukzession. Hk 12 (1930) 34–54.<br>– Evangelisches Franziskanertum. Hk.12 (1930) 67–79.<br>– Die Katholizitaet der Confessio Augustana. Hk 12 (1930) 172–208.<br>* Fendt, Leonhard, Der Wille zur Reformation im Augsburgischen Bekenntnis. Ein Kommerntar. Wallmann, Leipzig 1930. Hk 12 (1930) 242.<br>* Lortzing, J. Die Augsburgische Konfession im Lichte des Neuen Testaments und der Geschichte. Schoeningh, Parderborn 1930. / Ders., Die |

| | | |
|---|---|---|
| | | Augsburgische Konfession vom religioesen und nationalen Standpunkt aus beleuchtet. Schoeningh, Parderborn 1930. Hk12 (1930) 242f.<br>* Vollrath, Wilhelm, Das Augsburger Bekenntnis und seine Bedeutung fuer die Gegenwart. Deichert, Leipzig 1930. Hk12 (1930) 243f.<br>* Thieme, Karl, Die Augsburgische Konfession und Luthers Katechismen, auf ihren theologischen Gegenwartswert untersucht. Toepelmann, Giessen 1930. Hk12 (1930) 244.<br>* Worte des hl. Augustinus ueber die katholische Kirche. Hk12 (1930) 247f.<br>– St. Augustinus als Lehrer der Kirche. Hk 12 (1930) 249–256.<br>– Adorf von Harnack +, Seine Stellung zu Katholizismus und Protestantismus. Hk 12 (1930) 268–278.<br>* Aus gortgeschenkter Fuelle. Gedanken aus den Schriften des Kirchenvaters Augustinus. Ausgewaehlt und uebertragen von Wunibald Roetzer. M. Hueber, Muenchen. Hk12 (1930) 286.<br>* Vetter, Johannes, Der heilige Augustinus und das Geheimnis des Leibes Christi. Matthias-Gruenewald, Verlag, Mainz 1929. Hk12 (1930) 286.<br>* Gebet einer italienischen Franziskanerin. Hk12 (1930) 288.<br>– Ein Zeugnis von der einen, heiligen, katholischen Kirche. Die 7. Lambeth-Konferenz der anglikanischen Bischoefe. Hk12 (1930) 298–308.<br>* Wilfred Monod, Das Geheimnis des “Und”. Ansprache am 29. Augst 1930 bei der Tagung des Fortsetzungsausschusses der Lausanner Konferenz in Muerren. Hk12 (1930) 320–323.<br>* Das einfaeltige Auge. Homilie einer Franziskanerin am Vorabend des Festes der hl. Elisabeth. Hk12 (1930) 319f.<br>– Ex Oriente lux. Der 12. Hochkirchentag - ein Schritt zur oekumenischen Einheit. Hk12 (1930) 330–337.<br>* Lexikon fuer Theologie und Kirche, herg. von M. Buchberger. Hk 12 (1930) 339ff. [; 14 (1932) 172f.; EhK 16 (1934) 272.; 19 (1937) 92f.]<br>* Lesebuch, Religionsgeschcitliches, herg. von A. Bertholet, Heft 1–17. Mohr, |

| | | |
|---|---|---|
| | | Tuebingen 1926 (2) ff. Hk 12 (1930) 343–344 [; 14 (1932) 293f.; 16 (1934) 92.]<br>* Bernhart, Joseph, Der Vatikan als Thron der Welt. Paul-List-Verlag, Leipzig 1928. Hk12 (1930) 346–348.<br>– Evangelische Katholizitaet (Vortrag in Berlin, 6.10.1930). Hk12 (1930), S.355–366.<br>* Analekten zur Geschichte der Franziskus von Assisi, herg. von Heinrich Boemer. a. Aufl. von F. Wiegand. Mohr, Tuebingen 1930. Hk12 (1930) 345.<br>* Maertyrerakten, Ausgewaehlte, herg. von Rudolf Knopf. 3. Aufl., bearbeitet von G. Krueger. Mohr, Tuebingen 1929. Hk12 (1930) 345.<br>– Jungfrau-Mutter. Eine Marienbetrachtung fuer die Adventszeit. Hk12 (1930) S.351–355.<br>– Evangelische Marienandachten im Advent. Hk 12 (1930) S.370–374.<br>* Die Religion in Geschichte und Gegenwart, 2. Aufl. 1927/31. Hk12 (1930) 339–341; [14 (1932) 171.]<br>* Krebs, Engelbert, Sankt Augustinus, der Mensch und Kirchenlehrer. Gildenverlag, Koeln 1930. Hk 12 (1930) 377f.<br>* Das Leben des heiligen Kirchenvaters Augustinus, beschreiben von seinem Freunde Bischof Possidius, uebersetzt von K. Romeis. St.-Augustinus-Verlag, Berlin 1930. Hk 12 (1930) 377.<br>* Gilson, Stefan, Der heilige Augustin. Eine Einfuerung in seine Lehre, uebersetzt von Ph. Boehner und Th. Sigg. Hegner, Hellerau. Hk 12 (1930) 378.<br>* Gilson, Stefan, Der heilige Augustin. Eine Einfuhrung in seine Lehre, uebersetzt von Ph. Boehner und Th. Sigg. Hegner, Helllerau. Hk12 (1930) 378.<br>* Bibel und Liturgie, Blaetter fuer volksliturgisches Apostelat, herg. von Pius Parsch. Augustinus-Jubliaeums-Festnummer. Klosterneuburg bei Wien 1930. Hk 12 (1930) 378f.<br>* Harnack, Adolf von, Aus der Werkstatt des Vollendeten, herg. von Axel von Harnach. Toepelmann, Giessen 1930. Hk12 (1930) 380f. |